

秘傳大人小兒衛生論 乾

ヤ 9  
1124  
1







一 ありそり ありそり  
一 蛇貴 蛇貴

同 坤之卷目錄

- 一 男女大人老人蛇貴おりしに不<sup>し</sup>知<sup>れ</sup>た<sup>る</sup>害<sup>を</sup>なす事
- 一 蛇虫乃<sup>り</sup>忍<sup>し</sup>き事<sup>に</sup>附<sup>り</sup>おりし事
- 一 大人老人蛇貴の湯<sup>を</sup>する事<sup>に</sup>附<sup>り</sup>おりし事
- 一 蛇貴此<sup>れ</sup>をけ委<sup>し</sup>書<sup>に</sup>なる事<sup>に</sup>附<sup>り</sup>おりし事
- 一 蛇虫<sup>を</sup>身<sup>に</sup>皇甫<sup>隆</sup>上<sup>統</sup>之<sup>語</sup>事<sup>に</sup>附<sup>り</sup>おりし事
- 附<sup>り</sup> 老人<sup>を</sup>けし事<sup>に</sup>附<sup>り</sup>おりし事

以上



秘傳大人小兒衛生論 乾ノ卷

小兒ハ又<sup>ち</sup>勞<sup>を</sup>七<sup>つ</sup>傷<sup>む</sup>難<sup>く</sup>酒<sup>を</sup>の傷<sup>む</sup>或<sup>は</sup>美<sup>味</sup>事<sup>を</sup>持<sup>ち</sup>急<sup>に</sup>の  
 悩<sup>む</sup>又<sup>ち</sup>風<sup>寒</sup>暑<sup>濕</sup>も又<sup>ち</sup>母<sup>を</sup>汚<sup>し</sup>せば<sup>は</sup>後<sup>に</sup>を<sup>り</sup>安<sup>く</sup>小<sup>兒</sup>ハ  
 病<sup>の</sup>本<sup>と</sup>なる<sup>ハ</sup>貴<sup>ま</sup>て<sup>い</sup>ろ<sup>く</sup>の<sup>病</sup>と<sup>な</sup>り<sup>あ</sup>ま<sup>ら</sup>し<sup>な</sup>ま<sup>之</sup>蛇<sup>ハ</sup>小<sup>兒</sup>ハ  
 ひ<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>虫<sup>け</sup>お<sup>と</sup>し<sup>て</sup>ま<sup>貴</sup>の<sup>ま</sup>け<sup>と</sup>る<sup>難</sup>事<sup>に</sup>附<sup>り</sup>お<sup>り</sup>し事

小兒の虫<sup>の</sup>ハ<sup>腹</sup>の<sup>う</sup>ち<sup>に</sup>湧<sup>あ</sup>り<sup>て</sup>出<sup>て</sup>る<sup>ハ</sup>虫<sup>ハ</sup>か<sup>ら</sup>の<sup>之</sup>生<sup>ず</sup>  
 たる<sup>虫</sup>は<sup>虫</sup>と<sup>瘡</sup>の<sup>ま</sup>ま<sup>と</sup>い<sup>ふ</sup>人<sup>と</sup>胎<sup>毒</sup>乃<sup>も</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>事</sup>あり  
 り<sup>な</sup>れ<sup>ど</sup>虫<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>事</sup>乃<sup>も</sup>理<sup>を</sup>な<sup>せ</sup>ら<sup>る</sup>ば<sup>子</sup>は<sup>生</sup>た<sup>ら</sup>ず<sup>ハ</sup>父母<sup>の</sup>  
 氣<sup>和</sup>合<sup>して</sup>胎<sup>を</sup>成<sup>始</sup>ハ<sup>膏</sup>の<sup>ま</sup>ま<sup>と</sup>い<sup>ふ</sup>事<sup>に</sup>附<sup>り</sup>お<sup>り</sup>し事<sup>に</sup>附<sup>り</sup>お<sup>り</sup>し事  
 かり<sup>十</sup>月<sup>に</sup>生<sup>れ</sup>て<sup>子</sup>は<sup>胎</sup>を<sup>貴</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>事</sup>に<sup>附</sup>り<sup>お</sup>り<sup>し</sup>事<sup>に</sup>附<sup>り</sup>お<sup>り</sup>し事

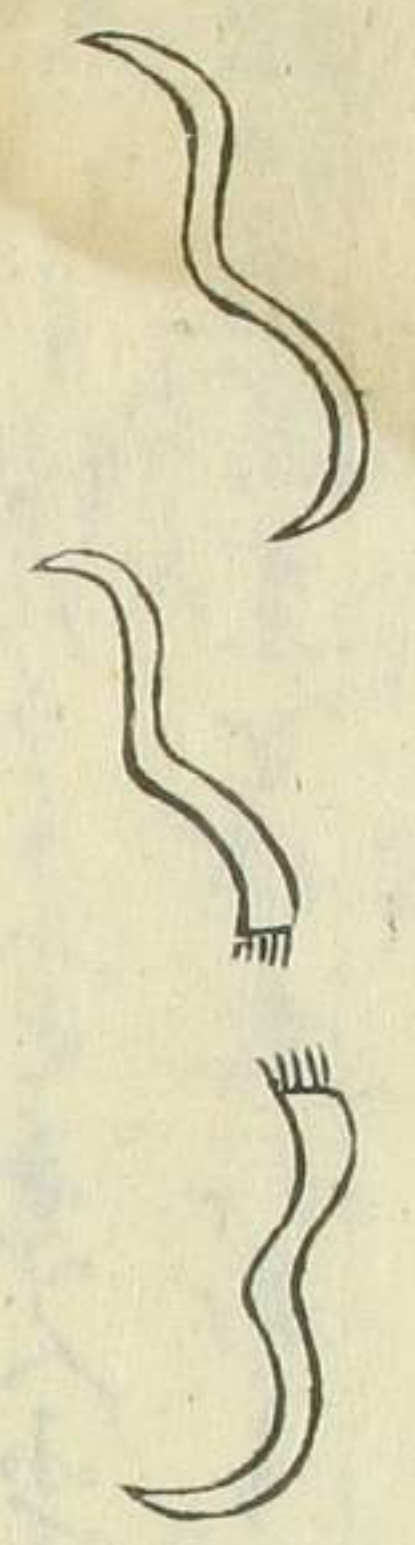
蛇ノ巻

おつても冷りまらりて腹と虫湧く小児のびーこいひは是や  
是葉と虫の湧く同ト花の時分ハ虫なきて葉と成て後、虫を  
生トて虫の湧たる葉中くあからと落る小児の虫も生て後  
湧て害となま之小児腹は虫さへなけむバそのそとあべ  
たとハ凡な子び或ハ樹木の實生て成長する小兒  
又口より成てハ脾胃のふらより食さ西ハ小こなれるゆにおそく  
或ハ熱よて腹のうち虫湧ていろくの病をなす之は是腹の  
うちなるゆ表をれと不知久くまりて虫ひひて葉さころそ  
大せつなり子とあなくとるゆあ小児の死するハ多虫次や  
大人よても脾胃れふめり熱熱の病虫湧て久く不活ハ死さる  
ゆあさきバ小児ハ熱多有てを恐るゆ之は是全身腹の内  
虫はさるゆあさきりたるハあさるゆは古人の名函いさいよ

己かのことなりと見へて書に委のせてるは知りて世よなりと  
不知りおきて小児と悩ことあるなり結、時、候とて是を  
人の腹の時より虫湧ていろくの病をなすに腹をんく虫を  
去葉と用ひておひよぬ病治せしゆと多葉はへあるゆは  
小児腹はびー湧たるゆを素人おてもんりける傳と虫と子退  
去秘傳の葉葉と表にあらはして世よ知しめ程又小児  
此病をなすに虫と去葉と用ひて病子く治し又極ら用は月  
一ふくづは表あると葉と用て小児は病おさずといふゆとあらはし  
引合てりらいろく小児をゆよそたのべー  
蛇虫の恐べき事  
小児食と食ふな色バ腹は虫湧て始ハ糸乃ごとく素麩の

こころと腹とを離して其のごとく、白蛇乃ごとく著れどく、  
なれど其腹のうちにて子をせし、腹くまきりけりハ是とも  
まて見しみて小児口に出るむしと割て見しにむしれ中  
糸乃ごとくなる虫多有り

其の心うち 心にてむしの中より出るがら其のごとく

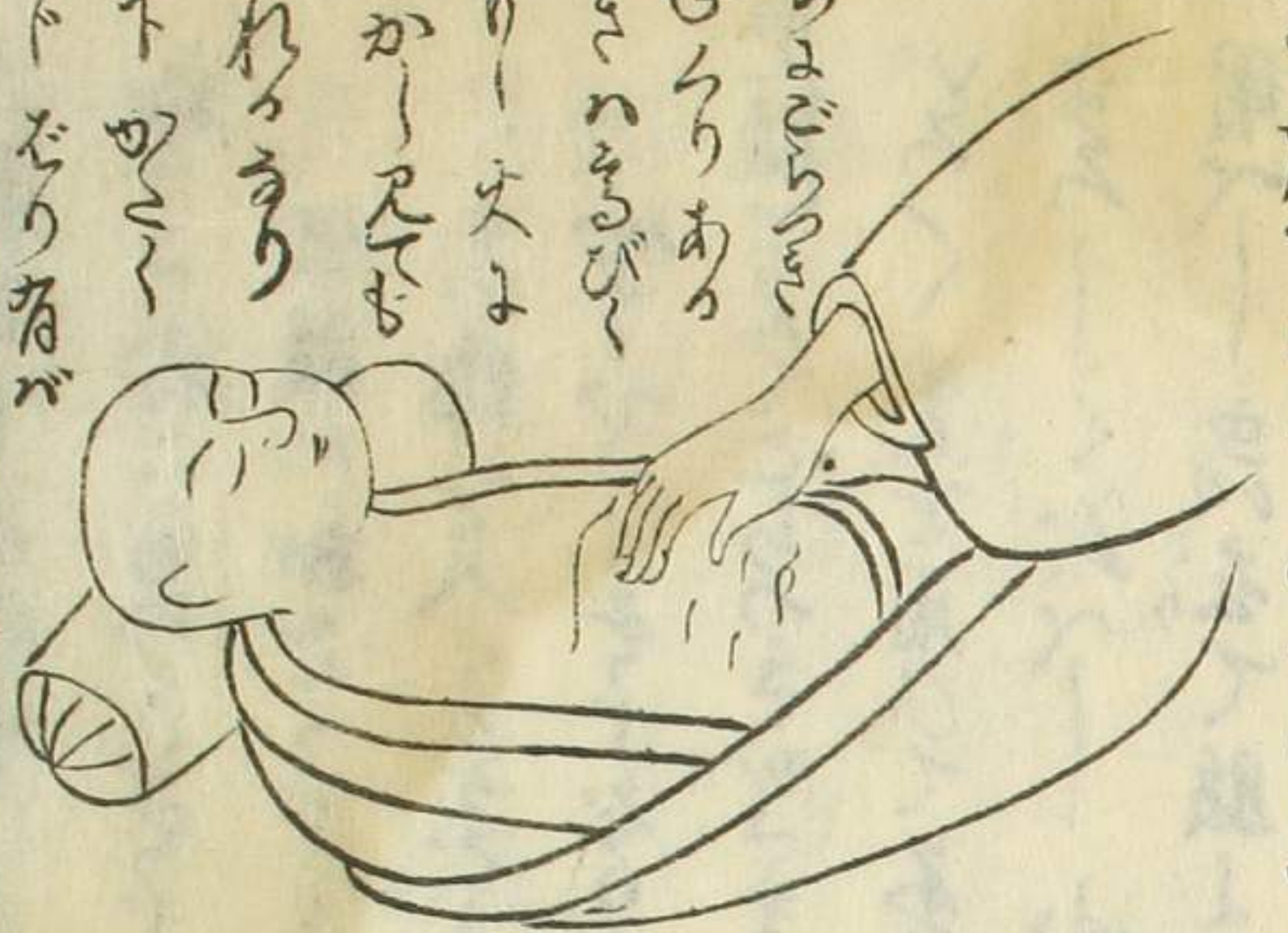


小児腹、其湯久くかき色バ  
ひ糸てふとく虫成子をせし  
腹くむしれ中なる

是にて恐さと知べし、たしひまならずとも其腹の介なるその  
湯て腹のうちにてふとく虫ならバ病となり其理を知べし  
又後ハ心うちへ命とおとすことも有と知べし  
又其湯ても外へは不知いらくの病をさまたましくハ大便も出  
はへも出ることもあとも是を見て虫の湯たるを知しハ建し

子ぬの世何とも外へは不知うち小虫と知し、肝腹や  
腹を見て虫と知し、事

小児腹は其の湯たるを知れんとおのり子のうく藤入たる時あとのけふ  
して肺とのをせむし先して腹をささぐり見るべし



心下ありあり  
心下ありあり  
心下ありあり  
心下ありあり  
心下ありあり  
心下ありあり  
心下ありあり  
心下ありあり  
心下ありあり  
心下ありあり

衣、腹のうきまきりしむしおとす何とも病者のといふべし

目のさめたる時ハあしよ力を合ふらへ  
ひとてんくく一也一又た又もあて  
とくあへて見せる子ハ一さいな一ニとせれ  
ぐんせき子ハ藤入たる時ハ一あり一  
人ハ一ひびたけむしびべにさ一むしとこつ  
むし先とそへてかとりさすやむらかな  
おへハさぐり見るべし

○心下ありありすし、心下ありあり  
○腹のうきまきりしむしおとす何とも病者のといふべし  
あしよ極て虫の湯たると知べし

後小病氣のおろる下地なりをせうこい衣く服あびあは  
 け表よりを薬を用ひたまへ虫と大便より解して服  
 和らよぬごらつさきどりのりもなくさるるを便を熱し  
 但服の和かるがよあしく服のうち中ふなけきば表よ  
 ま綿を入らぐごとくせよ由びの先よさるるのなり  
 心下でくまどりのはらかしくのりあも虫を殺して和らぬ  
 小兒服と見てごらつさきどりのりあは癖疾なきおひて  
 いろく薬を用ひて石炭は表のむしと去薬を用ひて  
 よろしく使べし小兒服と見て衣く服あびあは茶  
 用べし虫を去て服よろしく使病氣もよく治す  
 ○消虫湯 使君子五分 栝榔子五分 甘草一分  
 苦練根皮三分 是ハせんだんの根あら皮の赤きとけり去白赤とみ  
 ぬてせんト用也 日こやりのかきあうろくふて柿のりら也

右二方後して作て衣く追虫湯とよやく用べし  
 ○追虫湯 海人艸五分 苦練根皮二分  
 陳皮二分 半夏二分 茯苓二分 栝榔子三分  
 甘草一分 けぬり水とせんト用あ虫ことしく去  
 服よくなりて病とならざ又小兒病あても多虫よふを  
 病いろくあ虫のり病氣となりてもあし二方と用あは病  
 よく治すべし  
 其貴の上あがること育下は病ことあ衣く消虫湯ハよき  
 虫とおさへ追虫湯ハ下は病と大便より追虫湯方  
 みて衣く二方と虫を去といふことあし一は衣く二方の  
 二方とあはしていすむむおらあしく服のむしとあなは  
 又く衣く二方のりて用也べし多病して宜くいふならずん

小兒虫ふて病氣と成る小虫と知事

- 小兒顔色蒼白く氣ぶる者 是ららのうちこそぞこれ亦ありの  
で腹中とさまごけりゆなり
- 何となく不食する 是虫湧て食の初胃と腸胃の食を  
ふり虫湧ハさこめ入食するなり
- う川むけよ寐る 是虫を積をとおむらさおさへ方か  
あつるなり
- 鼻の上へ虫をト出る 是虫湧て鼻ぞうのさりと虫は氣に  
あつるなり
- 津液を多吐 是食流るる味をてつと多をく  
是虫ふと長く虫腸脹さうこみ  
ぬのたと滞すなり
- 小便毎トびく顔へうさ出る 是性ハ疥菜まてハ不虫と云バ不虫を  
はす
- さんのおもきる子有 是寸白虫さんへうしむひ  
なり
- 心下びく脈弱なりでさる 是虫湧て心下てふとくなるゆ  
なり
- 脈がさくさく 是又ぞうれおるなりのでさる虫はさる  
なり

- 移く大らさむハさむ 是ハ虫ひひてくごめさむなり
- 何とも不知 執執おゆさく見ゆ 此一湧て糸つとむしこと者  
虫を去て糸つりぞ也
- 腹よりうきでける 是ハ虫ひひかきぬゆへにらさきでける  
虫よりうきなり
- 逆風のこころびくつきよとよまらつめり 是む一湧て腹のぐあひありさゆはなすことなり
- 右よりよき有ハ何れも腹は虫湧てたすなり也 於おけバ  
はくむひひさむつりま病と成べりあけ表よりさ  
有ハ二方の薬ともちい多虫去て病となさむとま  
虫大便より下してはくむと成てよりまきと成べり  
右ハ外の薬とハ不也
- 小兒胎毒と死せることハなく 虫とて死せるハ多一故は常  
虫と去さく心はてし



世に小見口み才の時を海とていふ心をもるもあく虫湧て  
 惚ゆへたり先年昂息み才の時執かへり病氣不食  
 被て元氣を失ふなりとわさば法に医痔也とて種く薬  
 後よ志るなり依之り蟲湧て惚ゆも苟らんと虫を去る  
 二方とのまむるは赤やとき蟲大便つれて下て執かへり  
 虫を去るは遠老歩のりをゆるるも後れけり理ま有  
 小見人の病は何なりと虫を去るは病の治まるとを執り  
 小見腹のちり蟲湧生じても表ハ入んばいらくの病をかりて  
 外の土物といゆるの多し是を小見の病氣と虫を去る薬を  
 りらていらくの土物治せりみあらまうたすすい書と見  
 人よしく是と心たふふべし

○之案に小見執か乳食も進ばく目月つらびくつく事あり  
 医師をまきくと赤赤とちいてまきくならん早療治むらざと  
 笑傳親教の昂虫の薬を乞仍治てるる腹も下り治  
 是令虫湧て惚ゆとを執とてとも薬の巧んがざりと云て  
 於のすそ存二方とあまよまきくもあやも腹外傷  
 後よづまり一又つて腹むるは虫を去り虫殺く下て女  
 心下和 昂くもあそ又虫湧て腹やららるる執かも近  
 乳もよく吞服し収束せし也  
 曰哉女子不食執か病氣とて醫師をくくと腹外傷  
 文論なり昂 若はむの湧て不食なるも赤一前  
 二卵をばくもらるる蟲腹く吐出て終十日又下あり

二日も不食せしは、氣力方言、言傳、こもなく、只息のする斗る  
志危、七味白朮散と用て、見合、指さる、よ、次、才、え、氣、このひ  
食と好、一、五日、伸て、伸く、候、氣、と、成、事、者、一、成、一、是、虫、又、入、ら、ん、と、  
命、ハ、げ、ら、ん、と、入、く、ら、ん

○七歳、女、打、く、腹痛、その、ど、何、やら、ん、も、ろ、ろ、差、て、心、は、  
医、師、も、く、腹、痛、せ、し、む、ろ、て、論、な、り、虫、を、し、も、と、使、入、つ、ま、來、  
是、と、治、え、る、を、調、の、も、ろ、ろ、差、る、虫、の、上、より、なら、ん、と、  
存、二、方、と、あ、え、の、ま、む、む、は、中、より、虫、セ、ツ、吐、か、後、痛、心、  
咽、の、も、ろ、ろ、差、一、も、い、て、候、氣、セ、し、也

○二歳、成、小、兒、鼻、の、上、ま、ま、ま、か、氣、を、石、香、朮、煎、一、て、飲、こ、  
こ、ろ、一、吊、是、と、入、ら、ん、人、を、虫、湧、ら、ん、と、差、一、右、退、虫、湯、と、  
二、ふ、く、あ、い、一、は、執、退、氣、も、右、心、に、一、あ、る、伸、て、素、麩、の、  
こ、こ、ま、虫、が、ま、り、大、便、り、お、て、鼻、の、上、の、ま、ま、消、て、な、ら、ん、  
又、ま、ろ、い、て、汗、收、れ、一、と、な、ら、ん、

○八歳、成、小、兒、目、と、後、改、同、の、こ、ろ、も、是、び、り、つ、恒、父、母、改、  
吊、若、て、治、を、脈、と、ら、ん、沉、一、と、数、有、腹、を、ら、ん、心、下、が、  
腹、が、一、是、蛇、虫、の、腹、な、れ、も、痛、み、血、の、こ、ろ、一、吊、が、か、の、あ、  
た、ひ、入、る、痛、ハ、邪、氣、な、れ、も、蟲、腹、有、て、ハ、妨、と、な、て、  
さ、う、中、に、る、藥、き、う、が、う、又、入、ん、志、る、病、氣、治、ま、も、虫、腹、有、  
て、ハ、災、の、大、なる、べき、な、れ、バ、先、ッ、虫、を、去、て、後、ッ、び、り、き、を、治、ま、  
べ、一、と、右、退、蟲、湯、と、二、ふ、く、後、一、は、虫、セ、ま、一、大、便、り、下、て、  
腹、の、ま、ま、一、和、氣、も、正、氣、成、又、こ、ろ、一、用、一、は、汗、ひ、つ、き、

山 収氣せしや

○八歳の小児頭頂に瘡多し其瘡熱して不食面色蒼白  
 氣ふ毒なり或父母の曰瘡の毒なりとて医を頼む  
 頼むにおもふる論なり陰囊をれ大に熱するきある小児の  
 母曰是を毒なり虫の毒なるやと疹脈をとり曰瘡熱  
 不食瘡の毒にあらざる瘡に染して疹脈に表をりしは  
 熱なり瘡を念さんと上よりおもふ急治さし瘡を母内へ熱  
 たりて胃を責むる者有瘡外に瘡と有るは内熱なり  
 瘡の毒は不食するのみならず勿論其の毒の毒の毒は  
 虫の毒に遠なりとて衣を二方と解くと用し赤む  
 大便つれ下り下り女食をみ熱退散の毒なり

きんのとれいまひは虫の毒にて勝脱しすの故也  
 退散湯みわらしてはく腹むむ又虫十疔大便より下り  
 きんのとれいまひは虫の毒にて勝脱しすの故也  
 ○他に瘡なる者孫十歳の時腹おこし熱の毒なり  
 有て瘡熱の毒を種く医瘡をれも強なり久し不食故  
 瘡熱をて熱しすも成つれ其り曰疹脈をとり脈を  
 腹よりとりまむびく者虫の毒なりとて退散湯を  
 一ふりもちり揚枝の毒も成虫をとり下り腹の毒を  
 瘡を食すも力つるも又また細  
 虫をとり下り瘡を食すも目も瘡を収氣せし也  
 ○十三歳成男子不食熱も小便不通陰囊大にれ

素も入袋のりを入るごとく、或醫兩脚、或入く瘰癧、  
 小便利の部を待く、或もちもるて換なり、或昂易せしめて  
 診脈せしむ脈数、或をのけりて腹をみるよ心下つさる、  
 板のごとく是を虫の湧て腹、或滿、或乾、或もる食、或て虫  
 膀胱、或通水の尿を清、或乾、或ききんたわること、或全虫の  
 害となす、或遠方きと薬、或け病の治ること、或信合新、或  
 追蟲湯と申、或くちら下、或赤虫、或も下、或速、或小便、或魚、或  
 執、或追、或乾、或のうき、或減、或陰、或裏、或のそれ、或腫、或りて、或首、或め、或虫、或の、或魚、或  
 夏、或の、或乾、或る、或る、或ごとく、或乾、或り、或仍、或ち、或香、或砂、或六、或君、或湯、或と、或之、或が、  
 利、或小、或胃、或の、或氣、或その、或ひ、或食、或き、或み、或後、或平、或生、或れ、或魚、或よ、或成、  
 ○先、或及、或市、或中、或の、或肉、或煎、或と、或せ、或し、或和、或の、或真、或魚、或の、或甥、或十、或五、或歳、或て、或他、或

を云、或行、或病、或て、或叔、或父、或の、或不、或悔、或り、或叔、或日、或後、或菜、或せ、或り、或平、或ふ、或と、或行、  
 顔、或色、或ら、或く、或氣、或む、或り、或き、或神、或ら、或大、或雄、或よ、或あ、或り、或長、或り、或是、或と、或え、或て  
 根、或子、或と、或為、或り、或叔、或父、或の、或日、或病、或言、或にて、或自、或入、或故、或医、或師、或の、或け、或並、或り、  
 脾、或胃、或の、或傷、或り、或あ、或足、或た、或て、或凡、或菜、或百、或種、或も、或た、或せ、或ぬ、或れ、或と、或苦、或驗、  
 かく、或と、或め、或不、或食、或て、或氣、或む、或り、或く、或凡、或の、或言、或の、或む、或す、或が、或れ、或も、或有、或や、或と  
 小、或芝、或根、或も、或も、或ん、或せ、或き、或中、或の、或い、或せ、或並、或り、或世、或る、或が、或並、或り、或こと、或い、或病  
 て、或い、或く、或け、或氣、或ぶ、或せ、或う、或て、或お、或り、或て、或い、或は、或と、或云、或り、或板、或平、或が、或あ、或り、或不、或食  
 氣、或む、或り、或き、或の、或全、或虫、或の、或湧、或て、或な、或す、或る、或こと、或脈、或を、或診、或し、或沉、或実、或之、或大、或使、或の  
 小、或と、或同、或り、或浮、或か、或く、或遠、或と、或云、或は、或脾、或胃、或の、或傷、或なり、或と、或知、或脈、或て、或氣、或の  
 小、或と、或知、或板、或腹、或を、或る、或下、或板、或の、或ど、或堅、或是、或あ、或て、或浮、或虫、或湧、或て、或不、或食、或は  
 小、或食、或ゆ、或氣、或せい、或ま、或く、或言、或せい、或な、或さ、或り、或ぶ、或せ、或う、或板、或と、或あ、或せ、或り、或板

平が曰は病氣十が九つは治さべしと前の二方と試みづくと香砂  
 六君子湯と二ぶく薬店にて冥網存し二方と先へ抜ゆて  
 六君子湯と抜ゆべしとあてて後一ふき後古日経て好てんが  
 病人家因ふくをせしむと為し亭主の妻の曰先は此薬  
 後ゆべしと曰大役より赤虫六つも下て後胸透食進  
 言を止めしけ成喉へ心よく成りそや主人は後しよと云  
 是ホハ世上男女十六歳廿九前後虫湧てもおきてへいあをぞ  
 不食より氣むつうく成と幸甚と云遠むしと石治して  
 虫ひひふ食も喉く幸力落身疲終よあやまらと成り  
 有べし右く病氣もなれば子く右く二方と用ひあふべし  
 虫あれは子速下て病治さべし世と不知り也へ保と成  
 右く二方何病もいらしても障も成業はあらざる也

右ハ小児の病氣よて医師も病人毎かきりてそれく業とあはれ  
 是もてへんる病氣の業もゆ切なりしと何れを虫湧く  
 なる病も虫病の本なる虫と去業を用ひて早速使せし  
 是も小児の病のみで十四又十五前後でもまゝと知べし  
 痘瘡ハ小児の大役な色ども首尾よく出たべ別条あり曰く  
 出かけておこらざる中あり是内せいのみなき也なり何程大出ても  
 内まなれば別条ありの結たやうそく之も熱て腹の内  
 虫湧るとも之やうそくは後でもなり何れ後在の過虫湯と二ふ  
 用ひおけハ虫も去おきて不知虫の病死することなるべし  
 又驚風利病傷をえら世症の時でもおきてへそけ見へとも是  
 右く過虫湯と先へ試みく程用重虫も去版のうらやん

なきゆへ外の葉まかりゆく虫で死するとながらべし

小児のおりに虫よりなすこと有て虫を去て截症も有あきば小児  
病氣ならん何病でもすまら追虫湯と一試多く用ひてよるべき  
小児いまだ何とも不知らち追虫湯を抄く公けりらいるば病の  
おつることなからべし是のひて虫を去るべきや

小児未病なれども見ゆるうち脈に虫湧てありの之を  
たぬし見て是を知り予孫児のひて公け未病氣のていんを  
何ともあき附りや虫の湧らせぬと追虫湯と一試のせし  
ふと虫大便よりしゆる是みて小児いまだ何ともおひて  
足むし虫の湧てありと知仍ら抄く公けりらいるば  
有と下虫を時いんをうけて子母いんを隣り知



小児顔色をさうく見ゆる虫を去薬としてのまむるよ  
虫と去て病となりらるることあり

虫の絲つて風をなすたると清せしむ

けはのりら胃の故六箇年三月下旬の是昂が孫六文同ひは  
よまきと脈中へくとる仍脈をうるはばく大教也  
熱有て咽せうつく合ひきたるふもなり然れ小児のり故  
虫の有やんかりごととあとのけやん腹をうる心下かともむる有  
病氣の神の感冒のふもなれども心下腹のふもをんて虫湧て  
有ば先虫を去るし風乾の薬もちも腹は婦人の有てハ  
薬まてがまきとあひ先虫を去薬とあはしてそ風の薬  
もちゆべしを追虫湯と一試用よ翌日赤虫上り下り

執しやくのしやくの腹はらも和やわげ心こころやう成なれ虫むしあり有あてハ書かきなすべし又  
 一ひとふくりちいハ虫むし一ひとちド下くだて脚あしせうつまるは心こころなかるゆゑに  
 一ひと枚七味白朮散しちみはくじやくさん十薑肉桂じゆきやうにくゑいを加くて二ふたふくりちいでたの色いろ成なり  
 是こゝろも世よ上うへ小兒せうにの病びやうのハ何なにらな一ひと枚虫むしと去いる薬くすり一ひと枚  
 ちりてそ後のち何なになりとも見みえる病びやうの薬くすりとちりて  
 病びやうあり治ちやうすべし又多おほ虫むしと去いて治ちやうするの病びやう有あり知しべし  
 是こゝろも不ふ知ちの也なり

子育こぞくの悪あくとくく時ときハ有ありまき識しべし

世よ上うへ子育こぞくの悪あくとくく時ときハ有ありまき識しべし  
 死しするの終しゆう結けつ虫むしの湧わてそれとちりまきとていふは病びやう氣きの  
 毒どくとちりて病びやうのハ何なにらな一ひと枚虫むしと去いる薬くすり一ひと枚  
 ちりてそ後のち何なになりとも見みえる病びやうの薬くすりとちりて  
 病びやうあり治ちやうすべし又多おほ虫むしと去いて治ちやうするの病びやう有あり知しべし  
 是こゝろも不ふ知ちの也なり

命いのちも病びやうもハ有あり又また小兒せうにの中なかの虫むしも不ふ知ち死しまふことハ有あり  
 かねども外ほか子育こぞくの悪あくとくく時ときハ有ありまきとていふは病びやう氣きの  
 毒どくとちりて病びやうのハ何なにらな一ひと枚虫むしと去いる薬くすり一ひと枚  
 ちりてそ後のち何なになりとも見みえる病びやうの薬くすりとちりて  
 病びやうあり治ちやうすべし又多おほ虫むしと去いて治ちやうするの病びやう有あり知しべし  
 是こゝろも不ふ知ちの也なり

儻々心と身と虫を去るを考むる薬ともらば子育れ  
あーまことふてあつまい

前まへにのちにのちせよ小児ハ虫のこぼしハふて虫の怒おそるを不し知らず

是目よんぬぬ更なる虫のこぼしをせしめて薬のこぼるる者

小児の病ハ大方虫むしよりなるものなり虫を去ハ病治すといふことハ

右よまろすアといふ知べし

又小児後のうち虫むし解とけてハくればはひして右よまろすといふまを

なす故に腹はらとて虫の溜たまるハ解とれども是日を解とてふとく

せなりてハ薬もまじりまじりも有べきなればいまだせれ

不知しらずち海入草入うみいりくさいり方月かたつきニふくづもちてまろす也

虫あれば大便だいべんつれて下くだてむつりき病やまひならず虫なきもちて

又熱あつささく心下こころしたつらう腹はらよごらつまらぬりやふよぬるハ右

ニ方ふたかたともちての使し君子くんし入い消虫湯しょうじゅうとうと二ふた方かたもちては

海入うみいり竹たけ入いり退たい蟲湯じゅうとうと二ふた方かたもちて虫をさらし除のぞく也

又小児難治なんぢり症しやうと治ちせしめをたよしむ

○三さん方かた小児こどもおち腹はらよよ黄水おうすいと吐は煩わづ心こころは冷脈れいみやく併ひ閉へい

及およ死しの性しやうと見みえらる是蛇へび卵たまごの性しやう虫むしよよなす痛いた也腹はらををんる

心こころ下した張は破やぶ合あ合あ虫むしててなす也なり也なり是冷脈れいみやく閉へい絶たちちるること也

則すなはち右みぎ消虫湯しょうじゅうとう也

鳥梅山椒とりばいさんしやう 桂枝けいし 附子ぶし 黄連わうれん 厚朴こうはく 加くわて二ふた方かた

もろいふハ是暖ぬるもぬて心下こころしたつらう黄水おうすい吐はこと止と

一日いちにち解とて大便だいべんつらう虫教むしを下くだて熱あつささく煩わづ心こころも治ちす



物又速く右ニ方 吐くけらひは又虫下して 虫行収斂也  
 子足冷脈の用ハ右加味より一右を 疾ハ右心は右  
 但小兒腹又虫まなればむつう一痛くなることハナド  
 痛くならし虫ま去除ハ腹の中をなまぬ病自癒ハ  
 けりハ前ハ虫をさすもさすも 知べきなり故ハ  
 さるらちハ 腸で心なるがより一也  
 然ハ小兒ニ之々の 居ハ身へなまじり 格別 藥をきらふ子有  
 病ハ有て 藥をもちんともれば 嘔吐となりて 父母是ハ  
 めいさもなれぬ子ハ 狂く 腸で 虫と去除 用心より一  
 是ハハ方ハ 處がより一

○藥きらひのみ 虫ハ用心をさるハ 新く使君子ノ実を粉にて

かけ目ま色玉子一ツとよくときお 湯二兩と水一味入やき玉子  
 して玉子ハ 煎たまは使君子ハ粉と入前大々めて 喰べ  
 月二ツニツは 喰べ 何れ 藥きらひの子ても 喰なり 是も 腹  
 虫湧ても 去へハ 腹がうごらつる者より つけ二ツハ  
 喰べハ 是ハ何とも 見えぬらちハ 老ハ心なけて 喰べ  
 虫を 去ハ 病不記べ

○医書曰 小兒胃虚して 蟲或ハ吐或ハ下  
 蟲白也 長三寸一度 教十晝夜 教百至是ハ  
 鐵氏 白木散 下子 苦練 根皮と加味して 腹愈  
 白虫黒きと 養るもの 不後  
 右ハ 海老子ハ あれども 只 吐大便下と 見て 虫と 知ハ 是 處

有べし小児腹は虫湧てもまへハ不知にもおぢ大便秘結  
いふ病をなすけし時ハ如何 是をてハ不知也是を又知て  
治するがより知らん是を知りハ前よのおるなればけし書きて  
こゝろべし常は心けて考へ多ふべし

抑又虫を去除のハ前の方よりたるハなり虫ハ一ツ有ても害と  
なり

右錢氏白木散ハえ来大人小児を脾胃と神より吐いせらる

よりまなればいづれも虫を去る終まで口みふくりちいてより

○錢氏白木散ハ方ハ人參白木茯苓藿香木香葛根

耳竹おのくこぞ水煎してもちも丁子苦練根皮を加て

小児食とガツツ喰ふふなりて後凡十二之ヤとくらハいま

酒とのこまなくみ考七傷小の類はは唯食良積又六執火のこ

よく腹の蟲とせし是よりさくれ病となりてもそれハ不知也

随ふまじんりして赤の子の腹む湧て有の也いひて腹小

こらひまうのこりてさる是とあらざれば後よはすくやのり後

いふ病氣の候はなくともわくまはらう心かて退虫湯を

一末ふくづりちい多く虫あれがよく去る危病をくらざるべし

り又病ありて性三病のさすこかり医師の薬と後を

ことありとも医師よかちらざる前ハ二方ハ毒薬と先始

ニこぶくちい多ふべし小児の病とよ治すの重宝也

右小児のむしれまけをらうのうちなるがせよあひくへしきかづく

おごんりて強とあることあるは父母母その指てこれを知る

不知バあひいらぬすも有たらん即是と教年虫のゆ  
ためへんて世上はえらりむる也則婦人こそともくはかつて

が心は有べき為小兒とある蛇虫のゆふおしてハ世上に報  
 後よわらずけ長と信ふよりい多く小兒ハその月一  
 右小兒成長三才一の肝要也

小兒三才を脈紋三歳以上脈一才

小兒三才をハ脈さびまらず男ハ左女ハ右のくさびの紋を  
 見るべし才一の子と風園といふけ下をさるるを病なり才二の  
 才一と氣園といふけ下をさるるを病なり才三の子と命園と  
 命是をト上れば病治一才一と有

余園氣園風園



寸園尺 寒冷と況てろを命やくと大まよ  
 ちやくろを風とす小兒ハ大くも脈をやく  
 うるめ也是脈トて心づべし小兒のるハ八脈なりがごとく見たり

紅花ニト 半房子ニト 陳皮十文 枳殼 十文

豆大豆ニ合青豆ニ合 桑本 長一尺末口 長一分の枝 枳木 長一分の枝

右八味水又升入ニ末ニせんト小兒の熱身をあらふべし  
 又體とわが傷を子にせればるるを吹し

けのたけんる有る子ハ熱身をあらふる子ハ行勢を  
 あらいは小熱身をあらいたまハ熱身をあらふるを吹し

右二味ハまきこめてより一きまじないまきこめてより一有也  
 け評日をもさうハ小兒の大役也終る右ハ心乃ハ安んたれば  
 體のゆで湯にて水させ右八味のせんト湯ハるる  
 ころのちやくろあびせたらばとろし一わらん

九ノ巻

有りさうハ胎毒有り突由は毒と瘡多し子ハ有りさう際  
 是瘡毒先ノ後也又胎胎のうら房事と不潔ハ胎毒  
 多くと云 又云有りさうれもけハ突執大なるハ胎毒  
 虫湧生こと有なれば突執大の後右ノ追虫湯を二三  
 日洗いさるべし是有りさうハ胎毒なりて虫の爲に死む  
 なれば用心より有りさうべし虫湧てあれバ右後まつれて  
 下て虫の邪なり是有りさうをさるべし也  
 又云胎胎ノ内慎こらなく交接と無念なれば胎内の子れ  
 物成精よりすむ不胎肉して子れ不神候る候と  
 滞虫子の體つけ生てもニ支と有るがまの也是  
 突入の有りさ種と有るふほど又たをばりの種と有る

作生あるをよおくいらえハ生おもろくもく立悪  
 切べし物も他りの生もていれおの付は尿急つう  
 入るハ虫つき或ハ枯れむこと有也小児も是より  
 小児も食よりりて腹虫湧生いり此病と有る是虫い  
 たる也也腹のえふふのふとくく川合て二方の薬を  
 有りさうべし  
 又前よ有るごとくきんぐりそあり子又腹虫湧て  
 有是を不潔ひひつうくむこと有むつうく成も  
 腹のうらから也是と云くもか小児ハ食をいりて  
 らふよめてハ腹虫湧ことあれハ福虫と去用心有て右  
 追虫湯を折く有りさハ虫の邪を有るべし

大人小兒とも右遊虫湯を用いて茶をもどすものなり  
 是蟲を逐る茶ある也其の法はよけきハ茶をうけんつ  
 もどん也左あふ使君子入之消蟲湯丁子三葉香一に加て  
 暖くと用べーたとし茶をもどしても捨かると又遊わらわ  
 あらバ終ハ志あせべーと上のやうをて後遊虫湯を用べー  
 大人も蟲ふて病氣をなせ小兒ハ程く多虫て病氣をなすと知べー  
 前とあつてく腹虫湧て是とあせべーく成虫ひひ腹のうちて  
 子と生して多ありて茶もさうむ虫のこめ小命とかとを放ふは五  
 遊虫の湯なるゆゑをり知る秘傳の兄のよと虫と遊去くは茶  
 とあせべーめ小兒のうまいのづまーむけ書のおもてはまーむ  
 ちういあさうあれば引合せてたぬーめべー  
 乾巻終

虫を去るよろいさの遊書

昔の名医書遺て曰男十人療治するよりも女一人の療治じつ  
 女十人よりも小兒一人の療治あつてと  
 是女ハ男をうけて子をけるれ血あまりて月々怪水と成血下  
 結氣滞て血不順バ怪水滞て病を成を血ハ氣よりて  
 順なきバ女ハりのゆゑをなせざるゆゑ心乃うちに憂思悲  
 努妬嬪の愁ありて氣不和血閉て不明ゆゑなりひうぬ  
 病をなはけけハ氣をおとすうゑにせよ遊虫茶で治がはぬむつか  
 小兒ハけさるあふんハ胎毒のこごあつていろくの病をなす先を  
 を治と何れと脈ハささげ未體かこまら茶方あるこいあも  
 天ははくされバあうふなるとものこごあつてハみ體かまら  
 後母のこごあつてハ死するゆゑ遊虫茶をあやまらるをなはけけ

小児の病のつらごとく

小児の病亦凡なる病のつらごとくをいふく阿はくもつらごとく  
故に女十人よりも小児を人のれじむけりといふつらごとく  
然る小児の二三才と十七八才の比に合れ病をなせよといふ  
むつかしき病のおつらごとく種なり多岐に及ぶといふつらごとく  
なせは病をなせよといふ先は表にあらむとむけりといふつらごとく  
茶を先へもちあはる病つらごとく治死するといふつらごとく  
茶にあらむつらごとく小児の未病の氣おそく入るつらごとく腹中湧て  
有るは解る虫を去茶を用ひつらごとくむけりといふつらごとく  
解る病つらごとく又小児の病をなせよといふつらごとくむけりといふ  
めらむとむけりといふ茶を用ひつらごとく治死するといふつらごとく  
いと憂むとむけりといふつらごとく解る病の匣にあらむつらごとく

既小兒驚風のごく熱おそくをむけりつらごとくはつらごとく危つらごとく

驚風のつらごとく用ひて治せぬ虫を去茶をもちつらごとく治せぬ

但し驚風のつらごとく用ひて治せぬ虫を去茶をもちつらごとく治せぬ

脾胃の傷よりあつて多岐に及ぶつらごとく治せぬ

又癩疾み似て腹又癩塊でさつらごとく下つらごとく治せぬ

け表の二方れ虫を去茶を用ひつらごとく虫大後より解つらごとく

おらつらごとくあつて腹中湧て病つらごとく治せぬ

癩疾の瘡治はた人多く尅伐を用ひつらごとく治せぬ

茶のつらごとくあつてのつらごとく治せぬ

つら茶をもちつらごとく虫解つて癩塊つらごとく治せぬ

病つらごとく治せぬ

又小兒をむけりつらごとく治せぬつらごとく治せぬ 猪苓沢浮木通

車前子ありはうと茶をもちいて石炭小石二方入  
ひーとさる茶を用ひてく大便より虫解てお連小後能  
海ド新のうき腹れらり臍をよくぬく

是虫伸てあれりする道を滞りてとんく

又拾に又十七八の頃より虫湧おもてへんべ不食より  
身ぶせうとぬき痛らうとぬきとぬきおもてへんべ病気の  
茶ある一たきけ新虫を去茶を用ひて虫大便より解食  
とぬき茶さこや茶ぬく一此新右二方ての虫連活せしめ  
有一在るも虫湧てなまの病をなれば則病の本を  
治す故に病子よく治す

全疥小児の痒み酒との傷身れ疥癩をけせば小児の  
病氣におく腹は虫湧ていづくの病をすひをさうて

病よく治すと知るべし

但し小児虫湧ておもてへあらはするまで石炭むしひひたる付ハ  
中も茶さかきき中もゆるせんか一老にむけひと去  
茶をおくあまは虫さうて病おらうとらるべし又腹をみてまじ  
かんよなりむ下かさをむしと知るべし一やうくは虫有  
世上小児さうはうむしと病とぬきとぬきむしひひたると  
あやまちとぬき有又丹かして心と身は書のとらのんくふを  
むしたまう小児むしやう虫成のりといあり又そ人たかりに  
ゆるを虫のせうにのたすけもあるべし一程又大人老人  
虫湧て病をなまのけけ次ぎの巻にあるせし一は又ゆるく  
むしたまう中天なきと理あべし一別右むし一は病を治す  
二方のさうり茶茶にて買その人女中ても手合よてあへり

蛇虫治要之論

今て平が知己に覺子有て平を訶曰

昔自承の偏書を云んて古人の書を辨く撰て函出よ

あきと云又兼種ハ本州有而て何そ秘方とせん外

はニッ汝が鶴たるん否

答曰平若ら自己の去とんて何ぞ古賢乃去を辨哉

古人ハも徳廣く徳病を治すの大也蛇虫のゆゑにしてハ

平が偏出有るを云のを神性自乃ほくろいと云ふは

不審を信する程なくも古来の説とさして見ざる平

云所の言けりからべーはとてさへは古賢を辨て

漢書に唯古書のみありては後の偏去ハ大人老人

心して病苦を治すは宜きと小兒を治すは宜きと

又答曰 兼方ハさして切かりたるもの何れも貴子も

退黄湯乃陳湯と名付二陳湯苦練根皮と加味と

是龔氏蛇虫の治茶也是に陳の傳又海人草攪椰子と加味

せし虫を解するは巧なりてそのひくさ又流るがごと

併海人草ハ本州に小兒物生ふ用ひて毒を解痔虫を去

苦練根皮と合して仙痛を治すの能は攪椰子ハ虫を殺

瘡と云乃能有ては二味を加味したるて巧大なるも下

有むハ能治すともども心下より解がごとく是ハ

消黄湯と云はるよよろハ是陳傳て由来たれりて



後亦延何進也予が自ら乃蛇也よあはれ唯是るを言して  
世よまを魚なるものをもや大人の如くもて也

況ははのよ之予が身なり乃脾女年又十八月上旬卒平風の

ごうたおれ外て去後かく正命を脈寛矣卒脈之全時良の

中を卒倒也余一医師を招療治せむ三日不食で遂に

予病人の心下をおさへるは板乃とくかくごらつと有是蛇虫

有の腹なりと医療乃即又遊虫湯一かく何れのみすむま

大使より虫下て心下透たりといふ又一く脈を又むしり

下て心下いよくそきて合する事なれり遊く云後せり竹の

医師藤原をよして使ると云

是中を治しても蛇虫心下より成瘡不食とある蛇虫を

弟解ハ級食えしく命を奪はる一是木の類也云はし

然也蛇虫の中云云小のせくはれどもとらぢと

云々のを虫のせ一なれば不審とあら一之依る法也

先蛇虫を去るを通用ばよろ一と云はれ一はけ云也

又ある人の曰脾ハ去、最胃一去へのけはトるあれ脾去あむ一

りきうちあむこのとをよも何じ虫湯を深孤菜をん

治まべると併一深孤菜ハ海人草のゆ之未久利とも云

又曰脾去を堅固ありむらハ医乃奥及なれば脾をおさるよ

事とあつとせむ何ぞ蛇虫もあつとあらん蛇虫ハ

たよ有そのとる忍よたつと

予が曰存く毎を心ゆするハ深理にあはれ候とあらんは備友は

脾去の虫湧らちとらつるの治定の言のいふは  
石滑苦乃のあまきども脾胃不順よりきき生る  
又蛇虫湧たるといふゆゑよく見つけたるは浮菟葉を解まべし  
あまきども腹のうらにて皮一重うらなるゆへおひて不細故よ  
日を経くちくちくせたり救おく成て心下よりたると浮菟葉  
をて石解く故一腹よへおひては腹もたぬ一見て程又是と治す  
治をあるせ一也蛇虫へおひて用心あるべしゆゑ古賢の名医  
も見つけたくひひて人を殺めぬとあり蛇虫を  
本なりとまづの治とあらん  
程又脾去と補たれば蛇有ともあるにせむ蛇ハたつたりのこと  
ゆゑゆゑいふゆゑゆゑや是智言と人を迷たす古人の

意よそむくあんを脾胃と補ゆの医家の要とそる要あれども虫  
湧て久くなきハ心下より食及と滞して不食と成中く文支  
進考あてもゆゑる害をあるべ難となくん是と治すも脾去と補  
てハ浮菟葉用て不細保とあらん人虫を見れば解して何とあて  
脾去と補て可ならん  
又蛇虫ハあまき有りのことおひたれば他日ハ難と信べ一故虫ハ湧ら  
を不細捨を命令と前ノ基あて後よハ仕よふあまきいふるべし  
故脾去と補て蛇虫を不細ハ命と貯て治血脈と抱ふゆゑ  
後よハ滅とらるゆゑ何ん  
世よたましく時るとも進考あては今よも云後て研索する人  
名死とらるゆゑハ蛇虫の湧て久く成て是と知りひてせあり

蛇ノ巻

二二

心を貫意つういよ今と為なるは是こゝなりん歟

難經なんけい曰寸口脈平すんこうみやくへいふして死しするもの如何いかに答曰精氣内せいきうち絶たつて

是こゝ古人乃絶也こゝ思しりよ又精氣の絶たつするは余あま根ねをををひ

骨こつして精氣散さんれんなる級きふをべい只ただ寂然じやくぜんとして不動ふどう入い精せい意い

の級きふなる理りも有ありましト又精氣絶たつして死しする程ほどあるは脈みやくも

散さんれん寸口平すんこうへいは骨こつべからん蛇虫へいぢゆうハ卵らん卵らんなるをを瘧はつ疾ぢやくの類るい

みく宛えん脈みやく雨うみて平也故へいや故急きふとしてこゝみ死しするゆへ蛇虫

初はつめて長ちやうなり伸のびて心こゝろを貫つう意いへるん是こゝ又今いまの君子くんし考かうふ

尸し古こ賢けんも人ひと虫むしを殺ころすこと何なにのいはむい人ひとを殺ころす

忍しのびたままひ長ちやう一いつ尺せきもなれば命いのちを落おとすることとは漢かんのいはれ

賢子のけんしとしてしることとしてしることのいはれなり一いつ尺せき一いつ尺せき

乾之卷終

追加

世上多病せうじやうたへい氣きのいはれなりはなるは醫い療りやうをもとむことはなるは後のち蛇虫へいぢゆうハいげんすこと

病びやうのいはれなりはなるは子こ丹たん腹はら蛇へい痛いたてるはなるは病びやう氣きのいはれなりとしてしることはなるは後のち蛇虫へいぢゆうハいげんすこと

業わざはなるは子こ丹たん腹はら蛇へい痛いたてるはなるは病びやう氣きのいはれなりとしてしることはなるは後のち蛇虫へいぢゆうハいげんすこと

教しゆ訓くん成せいて後命いのちを落とすることはなるは後のち蛇虫へいぢゆうハいげんすこと

右みぎ之の遺い喪さう湯とうを手合あへておくらはひあべい蛇へいあはるは大おほ便べんより

左ひだり病びやうとしてしることはなるは子こ丹たん腹はら蛇へい痛いたてるはなるは病びやう氣きのいはれなりとしてしることはなるは後のち蛇虫へいぢゆうハいげんすこと

さればなられぬ事ことはなるは子こ丹たん腹はら蛇へい痛いたてるはなるは病びやう氣きのいはれなりとしてしることはなるは後のち蛇虫へいぢゆうハいげんすこと



